

月例研究会抄録

平成24年度明倫短期大学学会月例研究会は、平成24年4月26日の第55回から10月25日の第60回まで計6回が開催された。記念の10周年で数えられた総演題数は60回で112となった。(通算回数は前身の明倫短期大学研究会からのカウント)。暦年の演題名等は学会HPを参照されたい。

第55回(通算第138回):平成24年4月26日(木)

(座長:木暮ミカ)

心肺蘇生のガイドラインと 今後の診療室での取り組み ～AHAガイドライン2010より～

石井多恵子(附属歯科診療所Dr)

深井裕子(附属歯科診療所DH)

緊急事態に遭遇したとき、多くの人はパニックになり、救命処置を施すことができないケースも多い。これを避けるには、日ごろからのトレーニングとシミュレーションを繰り返すことが必要であり、当歯科診療所でも最悪の事態、つまり心肺停止状態を想定したトレーニングをAHA(アメリカ心臓協会)のガイドラインに準じて行っている。

AHAガイドライン2010では、BLS(一次救命処置)の手順がこれまでのABC(気道・呼吸・胸骨圧迫)からCABに変更された。これは50年ぶりの大きな変更である。これによりBLSの初期の最も重要な要素である胸骨圧迫がより早く開始され、換気の遅れを最小限にすることができるようになる。

一方、歯科診療で起こる緊急事態は、心肺停止状態よりそれ以外の緊急事態すなわち『意識・反応がある』状態の方が明らかに多いのが現実である。今後は、そうした状況に対しても即座に判断し対処できるよう、当診療室でのトレーニング方法を確立し積極的な診療所スタッフの知識の習得に取り組む必要がある。

重付加型シリコンラバー印象材の 撥水性と界面活性剤の使用効果

五十嵐雅子(歯科技工士学科)

重付加型シリコンラバー印象材は、寸法精度に優れ経時的にも安定しているが、撥水性を示すこと

から模型の表面性状に影響を与える気泡の迷入や面荒に注意しなければならない。この解決には、界面活性剤が有効であると考え、そこで、本研究では界面活性剤が添加され親水性を向上させたシリコンラバー印象材の撥水性と界面活性剤の使用効果を確認する目的で実験を行い、その結果を報告した。重付加型シリコンラバー印象材の板上に残存する硬化石膏の面積率がシリコン板上の平均25%を占める程度であったが、界面活性剤を塗布すると、硬化石膏の面積率87%以上を占めたことから効果的であるといえる。また、試験片に残存する硬化石膏の面積率は、石膏の混水比と石膏の粘性によっても変化した。シリコンラバー印象材の硬化石膏の表面性状の観点からも印象内へ注入する石膏は、標準混水比を守り、練和後はすぐに注入することが好ましいことが明らかになった。

第56回(通算第139回):平成24年5月24日(木)

(座長:渡辺美幸)

顎口腔機能学と歯科補綴学における授業の 新たな取り組みー咀嚼を理解するためにー

野村章子(歯科技工士学科)

学生が日常生活の中で考えている咀嚼を歯科医療における咀嚼として理解できるように、検査用グミゼリーによる咀嚼能率測定を取り入れた体験実習を試みた。顎口腔機能学を受講する歯科技工士学科1年、歯科補綴学を受講する歯科衛生士学科2年を対象に平成23年度および平成24年度に実施した。口腔内状況を確認後、グミゼリー30回自由咀嚼後の粉碎状況を咀嚼能率スコア法から求めた。次に、自由咀嚼における片側咀嚼タイプはその反対側を、両側咀嚼タイプは片側咀嚼を指示し、同様に咀嚼能率を求めた。さらに、歯科技工士学科では実習で製作した上下顎の全部床義歯を半調節性咬合器に固定し、天然歯と比較した義歯によるグミゼリーの咬断状態を視覚的に観察させた。

両学科ともに両側咀嚼に比べて片側指示咀嚼の方が、また片側咀嚼に比べて反対側指示咀嚼の方が咀嚼能率は有意に低く、歯科技工士学科では咬合器上の義歯による咬断状態が口腔と異なり想像以上に低いことも学生に理解させることができた。

次に、学生が提出したレポートの記載内容と、そ